

ナチス第三帝国時代に生きる芸術家の運命

—— ハンス＝カロッサの場合 ——

村 山 正 雄

要 旨

詩人ハンス＝カロッサが1938年ベルリンにおいておこなった講演を手掛かりとして、ナチズム体制下における文化政策や言語文化の概略をまず瞥見した。このかかわりの中で、いわゆる「国内亡命」という立場を余儀なくされたカロッサが、ナチ党の公的な集会で講演するにいたる軌跡を、主として日記と書簡に拠りつつ解明しようと試みた。

キーワード

第三帝国 (Das Dritte Reich), ナチズム (Nationalsozialismus),
文化政策 (Kulturpolitik), 国内亡命 (Innere Emigration),
ハンス＝カロッサ (Hans Carossa)

はじめに

1938年11月20日、ハンス＝カロッサは、公刊された書簡集によれば、「ベルリン、ドイツ劇場において《孤独と共同体》(Einsamkeit und Gemeinschaft) について話し」ている。この記述そのものは、編者によって注記された簡単な一行にすぎない。けれども、ナチスが政権を掌握して5年後、その言論統制下にあるドイツ帝国の本拠地ベルリンで、さらに言えば、私的なサロンなどではなく公の劇場で「話し」たという事実は、なかなか興味深い。ここに言う「話」とは、つまり「NSDAP (Die Nationalsozialistische Deutsche

Arbeiterpartei, 通称ナチ党の略称) の総ての精神的, 世界観的教育のために
総統全権委任者のもとにおける著作物育成局の第5回作業会議」の際におこな
われた講演なのである。

しばしばカロッサは「医師にして詩人」(Der Arzt und Dichter) と呼ば
れ、『詩集』をはじめ『ドクトル・ビュルガーの運命』(Die Schicksale Doktor
Bürgers, 1913/1930) や『幼年時代』(Eine Kindheit, 1922) など彼の作品
は, 人間の傷ついた魂を癒すという意味で「治癒の文学」(Heilkundige
Dichtung) などとも評価されてきた。医師でもあった作家自身の生活の周辺
を内面的に観照しつつ, 正確にしかも穏やかにそれらの本質を描き出すという
のが, 彼の詩作における基本姿勢であり, その詩精神はいわば外面的な社会批
判や政治的発言にはきわめて遠いものとされている。遠いと言えば, カロッサ
はその生涯の大半を首都ベルリンから遠く隔たった南バイエルンの, しかもオー
ストリアやチェコスロヴァキアと国境を接した, まさに辺境の古い地方都市パッ
サウの近郊に暮らした。時代が時代とはいえ, ナチスとの接触を極力避けてい
たというこの詩人がベルリンの大舞台でナチ党関係者の前で講演をするに
いたる経過は, 現在においてもなお, 十分に明確にされているとは言い難い。
本論考では, その問題となっている講演を手掛かりに, この時期のカロッサに
たいして接近を試みようとする。それに先立ち, 当時のドイツにおける言語文
化の状況について簡単に概観しておきたい。

一,

1933年1月30日, 経済的困難, 社会的不安, 小政党の分立や左右対立など
による政治的混迷の後, アードルフ＝ヒトラーが当時すでに余命いくばくもなかつ
たヒンデンブルク大統領によってドイツ国家の首相に指名され, 実質的に国家
社会主義ドイツ労働者党, いわゆるナチスが政権を掌握する。以後12年間にわ
たって, いわゆる「同質化」(Gleichschaltung) の名目のもと, さまざまの暴
力的威嚇, 管理, 抑圧による支配が隠微にあるいは公然と行われる体制の正当
化される発端である。この体制のもたらす脅威と恐怖とは, ときに「友邦」か

らの羨望と称賛をも伴奏に響かせながら、同時代における全世界に及んだとすら言い得よう。そればかりか、現代においてもなお、ナチズムによる負の遺産はドイツ人一般にはひとつの刺として残り、ネオナチと呼ばれる人々には外国人排斥の根拠を受け継がせ、さらには政治支配の技術として評価しようとする立場も皆無ではない。

「同質化」とは大雑把に一般化して述べれば、“民族の政治的意志を統一させる”ということなのであるが、事柄の性質上、むろん単なる理念に止まるべくもない。すなわち、非ドイツ人であるユダヤ系市民の公的機関からの排除、ユダヤ人カール＝マルクスが展開させた共産主義およびその同調者の排除に始まり、以下、ドイツ国内にとどまらず、併合地域や占領地域のささいな生活の局面に至るまで、この「非ドイツ的なるものの排除」はグロテスクに拡大され、あるときには法律、あるときには民族のいわば自然発生的な運動の姿を装いながら貫徹されて行く。

このような体制のもとにおいては、個性や独自性をいわば売り物とする芸術家、学者たちの立場は緊張したものとならざるを得ない。まして従来からナチズムの危険性を指摘し、批判してきた者であれば、この時期にドイツ国内にとどまるならば、テロ活動や強制収容所の例が示すように、その身边には絶えず日常生活のみならず、生存の危機という影が陰に陽に付きまとうこととなったからである。

左翼として知られた劇作家ベルトルト＝ブレヒトをはじめ、いち早くナチス政権に反対を表明した作家ハインリヒ＝マン、反戦小説『西部戦線異状なし』で知られるエーリヒ＝マリア＝レマルク、ユダヤ系作家フランツ＝ヴェルフェル、さらにはトーマス＝マンなど、日本でもなじみ深く親しまれた作家たちの名を挙げるのみでも、国外亡命への道を選んだ知識人、芸術家のおびただしさは想像の外であることが理解されよう。このほかにも、アメリカ映画の黄金時代に寄与した映画人、演劇人、そして音楽家、画家、フランクフルト学派の名で活躍した社会学者、哲学者、はては原子爆弾の製造にかかわることになる科学者たち。ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』の主人公たちで

あるトラップ一家もこの時代の亡命者の群れのなかに数えられる。

改めて述べるまでもなく、極めて少数の幸運な例外を除き、わずかの身の回り品を携行するのみで故郷を脱出せざるをえなかった亡命者の生活は、困難をきわめた。けれども、文筆を生業の基とする作家、詩人、ジャーナリストの場合、音楽家や画家など他のジャンルに属する芸術家とはまた別の危機と、さらに直面しなければならなかった。つまり、母語であるドイツ語で著作したとして、さて自身が語りかけるべき相手たる読者が失われているのである。すでに1933年2月から3月にかけて、ドイツの国家的文化機関であるプロイセン文芸アカデミーから、その代表者たるハインリヒ＝マン自身を始め、弟のトーマス＝マンなどドイツ的でないと判断された作家たちは次々に排除され、あるいは抗議して辞任している。そして同年5月10日、ベルリン・オペラ劇場前広場ではナチス党員の学生たちによって、彼らが名指しする好ましくない作家の書物を火に投じるセレモニーが大々的に展開される。非ドイツ的書物の図書館、書店からの一掃も、その成否はともかく、この同質化の行き着く先にある。そして詩人ハイネの格言のとおり、書物を焼いた者はおしまいには人間をも焼くことになった。

執筆禁止、出版・販売停止、読者不在。若く成長期にある作家であれば、その前途にとっては、こうした状況はまさしくその言葉どおり致命的であると言うほかはあるまい。もちろん、すでに一家をなしたと目される人々として、事態はさして変わらない。たとえ亡命した先の国々でその芸術、言語文化や風土との新しい出会いが与えられ、ここから生みだされた作品が幾多の年月を経た後に「亡命文学」(Exilliteratur)として評価されることになろうとも、である。未来への確実な展望を見失い、生きる手段を否定され、亡命先にまで迫る母国からの圧迫に悩み、やがては異郷にみずから生命を断つ悲劇も、あの天才的批評家ヴァルター＝ベンヤミンなどの例を待つまでもなく、稀ではなかったのだ。

「非ドイツ的」とはいうものの、この概念そのものがかなりあいまいで、恣意的な適用に委ねられるのは明らかであった。誰がそれを判断するのか、とい

うことである。ある文書の書き手がユダヤ系であったり共産党員であれば、ことは単純であった。それが、たとえば「第一次世界大戦にかかわる記述が反戦的か否か」、「そこに登場するドイツ兵士が英雄的か否か」、あるいは「描き出された風俗が不道徳か否か」などとなれば、俗な表現をすれば、そこには「言ったもの勝ち」の世界が現出する。この基準そのものからして、ある人間を排除し陥れるためにのみ機能するという意味では、そもそも不道徳なのである。

このような状況において、第三帝国内に著作活動が可能であった作家は、ナチ党員であるか、民族主義的であるか、あるいは作品に政治・社会批判的要素が少ないか、ドイツの文化的伝統の基盤であるキリスト教にたいする信仰を明白に標榜していた人々などに、ほぼ限定されることになる。付け加えれば、このキリスト教にしても、この宗教が受け継いでいるユダヤ・ヘブライ的要素の排除を試み、“ドイツ民族のキリスト教”を唱導した「ドイツ的キリスト者」(Deutsche Christen)と名乗るひとびとが、権力者の意を受けて、とくにプロテスタント系の教会に勢力をもっていたことを忘れてはならない。同質化、すなわちここにかかわる問題で言えば、言論、表現、思想の統制とは反面、権力者に資する限り、保護、奨励、育成の言い換えとなることは、古今東西、変わらないであろう。

数が多いとは言えないが、この時期のドイツ国内にはナチズムそのものあるいはこのような支配を嫌悪する詩人・作家はカロッサを別としても、確実にいた。もちろん、強制収容所に隔離された場合、あるいはエーリヒ＝ケストナーのように執筆禁止とされつつドイツ国内に止まった場合などを除いてである。そして、そのカロッサが、第三帝国において極めて優遇された作家・詩人の一人であることも、否定できない。彼は寡作な作家であったとはいえ、この厳しい言論統制下においても新しい作品をドイツ国内でほぼ順調に発表、出版し続けることができたからである。当初はナチズムを賛美していた詩人ゴットフリート＝ベン、また政治学者カール＝シュミットらとファシズムの理論を組み立てた作家エルンスト＝ユンガーですら、ナチス支配の浸透するにつれて医師や職業軍人といった自分の経歴を利用して、ナチスとはついに一枚岩とはならなかつ

た国防軍組織の中へと紛れ込むことにより、ある種の「亡命」を図っていた。その一方、カロッサは、第三帝国を代表する詩人として、しかもナチ党機関の主催する講演会に党員やその同調者たちとともに登場する。

そこで次章では、カロッサ自身がこの情況に立ち至るまで、第三帝国のもとでどのような道筋をたどって来たのかを、公刊された彼の日記、書簡を手掛かりに瞥見してみることにする。

二、

さて、カロッサ自身も認めているが、彼には他人の要求を無下には断ることのできない“性格の弱さ”がある、と言う。この言葉は、しばしば彼の作品を解説する際に用いられ、同時に、彼が自らの意に反してナチズム体制に組み込まれるに至ったのも、この性格に一因があるとする指摘も稀ではない。

このナチズム支配の12年を回想した『異質の世界・生活報告』(Ungleiche Welten. Lebensbericht, 1951)では、その表題が示すように彼の内外にわたる観察と、そして葛藤や錯誤、逡巡が語られる。このきわめて率直な告白の書は、もちろんある読者には感銘を与えたが、同時に、初めて公にされた詩人のナチスとのかかわりや政治的無知、まさしく“弱さ”などのゆえに、別のひとびとには嫌悪の対象となった。しかし、カロッサ自身にはナチズムの支配体制に協力してしまったという自覚は相対的に希薄に思える。むしろ支配者の側が、カロッサを体制に組み込もうと、かなり積極的に働いたと考え得る状況のもとで、組み込まれてゆく自己とその世界の全体像を見つめようとする、いわば観照の姿勢がこの作品の基本にあるように思われる。傍観者といえ、言いうるかも知れない。そこからすれば、この作品だけではなく、公刊された彼の日記や書簡集に見る限り、さして多くもないナチスとのかかわりも、直接のやりとりではなく、現代日本の芸能・スポーツ紙には親しい、いわゆる「新聞辞令」のような形での当局発表に始まる例がしばしばなのは、象徴的ですからある。

ナチスが1933年に政権を掌握するや、ただちに言論統制に乗り出し、そのひとつがプロイセン文芸アカデミーの肅正であったことは、先に指摘した。代表

者ハインリヒ＝マンが追放され、排除や抗議の辞任などが相次いだ後、欠員補充をかねて、新たに招聘されるべき作家・詩人のリストが文化省に提出された。このリストの中に、ハンス＝グリム、フリードリヒ＝グリーゼ、エルヴィン＝ギドー＝コルベンハイヤー、ハンス＝ヨーストラ民族主義者としてつとに名高い人々に並んで、カロッサの名前が上がっている。しかしカロッサはこの招聘を早々に拒絶する。

この招聘を知った日、日記には次のように書かれている。

5月8日、月曜日。雨天。新聞で新しい詩人アカデミー (Dichter-Akademie) への招聘を知る。我らの幸いなる祖国において、何かに対して事前の同意がこれ以上に問われるなどとは、誰にも思えまい。キール市ではヒトラーの猛り狂う憎悪の演説。フランス人に対するこの静められぬ激怒が、自分の民族協同体に向かってぶちまけられている。… (以下略)

(Tagebücher 1925 bis 1935, S. 245)

翌5月9日、親しい作家シュテファン＝ツヴァイク夫妻にあてて心中のとまどいを手紙で以下のように告白している。

……昨日はまったく驚愕して、アカデミーへの、詩人アカデミーへの招聘を (薄い印刷でした) 読みました。ここからは本物の詩人たちは、念入りに締め出されることになっているように見えます。これまでに、そもそもわたしに入る意志があるかどうかを、誰もたずねて来なかったのです。あっさりと「招聘する」というのです。こんな場合、どのようにふるまえばいいのか、まだはっきりとは決めていません。現在流行している精神状態では、きっぱり拒絶すれば、サボタージュと見なされるでしょうから。……

(Briefe. II., S. 283)

一週間後の16日,, 再びツヴァイクに宛てて、「とても礼儀正しい、そしてきっ

ぱりした文面で」(Briefe II., S. 283) 拒絶した旨を伝えている。ウィーン生まれのこのユダヤ系作家は、後に国外亡命の途を選び、1942年にブラジルで妻と共に自殺死を遂げることになる。

この拒絶の後、“カロッサはもうだめだ”といううわさがささやかれていたことが『異質の世界』(S.W. II., 679) に記されている。この記述はカロッサの自己弁護の一例として引き合いに出されるが、彼の縁者たちが彼の身を案じて書いた手紙を併せて読めば、それと同時に、この時代を生きる普通の人々の息づかいもまた、漏れ聞こえてくるであろう。引用するのはかれの妹の連れ合いからの手紙の抜粋。日記集の注に付されたもので、日付けは示されていないが同年同月中のものである。

この敬意をはねつけるという道徳的な権利はあなたにはありません … 踏み出してしまった一步を起こらなかつたことにすることはあなたの声望であれば困難ではないでしょう。そして衷心から、時をゆるがせにしないようお願いしたいのです。…… (Tagebücher, S. 536)

この文面のみでは、カロッサに“幸運をとらえるよう”勧めているのか、“にらまれないよう”忠告しているのかは、必ずしも判然とはしない。ただ、その言い回しは忠告に近いと推測できる。

もちろん、新政権に期待をかけ、熱狂する人々もいた。抵抗を試みるグループ、個人も少なからず出現する。けれども他方、極端な排外主義を高言してはばからず、しかも粗暴で画一的なこの新しい支配者を息をひそめて見守る外はない人々の存在も、この時代について語る場合、忘れてはならない。後年、文学者の政治的責任という視点から、カロッサは非難され、さらには黙殺されるにいたるのであるが、この手紙は強権的政治の下に生きる普通の市民のとまどいを伝えていると思われる点で興味深い。

これより後数年、彼がすべての作品の出版を託していたインゼル書店の社主アントン＝キッペンベルク教授の仲介によって、ナチスのボーイスカウト組織

であるヒトラー・ユーゲントのために自作詩の朗読会を1934年に行ったほか、ナチスとのいわば公式のかかわりにつながる記録は見当たらない。この間、1936年夏にはベルリンでオリンピックが開催され、ナチスの国際的認知、宣伝、国威発揚の場として大いに役立てられたはずであるが、カロッサはこの国際的一大イベントにも関心を示していない。年譜や回想記にしたがえば、折々のイタリアへの旅行のほかは、著作に没頭している。彼のこの静かな生活が乱れ始めるのは、ナチス・ドイツが公然と戦争政策に取り掛かるのと、ほぼ軌を一にした1938年になる。

皮肉な運命と言うべきであろうか。1938年8月、カロッサはフランクフルト市よりゲーテ賞を受ける。15歳の誕生日の記念に両親からゲーテ全集をプレゼントされて以来、ゲーテに親しみ、ゲーテの詩精神に多くを受けてきたカロッサには、この受賞はことのほか喜ばしい出来事だったであろう。受賞の式は1938年8月28日、ゲーテの誕生日、フランクフルト市で行われた。余談になるが、これに先立つ同年6月8日にワイマルのゲーテ協会で行った講演『現代におけるゲーテの影響』(Wirkungen Goethes in der Gegenwart)は、現在においてもなお、ゲーテ研究に欠くことのできない文献のひとつに数えられている。さて、この受賞が、いわばゲーテが、カロッサをナチスに接近させる契機を与えたとしても、過言ではないのだ。

受賞式の三日後、9月1日、フランクフルトからの帰途の車中、カロッサはのちに彼の二度目の妻となるヘドヴィヒ＝ケルバーにあてて、沈鬱な手紙を書いている。長くなるが、引用する。

最愛のヘドヴィヒ、いま、ほんとうに重苦しい気持ちをすこしでも軽くするほかはなく、あなたに手紙を書く。ひどく揺れている列車がそれをさせてくれる限りだけけれど。今朝早く、コーヒーを飲みに行くと、キッペンベルクさんが新聞を手に、かなり興奮してわたしに向かってやって来た。「あなたは帝国党大会に招待されたんです」。ほんとうに今日の新聞すべてに「賓客」(Ehrengäste)のなかに載っているよ。もちろん、断ろうというのが、最初

の気持ちだった。けれど、そのあとポイトラーさんが来て、こんなことはしないようにと懇願したのだ。彼が言うには、この度の招聘に応じておけば、今後に別のどんな招聘があっても、ずっと簡単に断れるだろう。これはポイトラーの直接の招聘なのだ。もし応じないなら、それは敵意を抱くものと受け取られるだろうというのだ。手短かに言うと、わたしとわたしの作品だけでなく、それでなくても厳しい反感をもたれているゲーテ協会のためにも犠牲を払ってほしい、というわけなのだ。そのことで、わたしは、今日のような事情におかれている知的な人々のために、奉仕をすることになるだろうと(リヒャルト＝シュトラウスもこの賓客のなかにいる)。長くいることはない、ただ、少なくともわたしがいることを見せてほしい、と言うのだ。ああ、大好きなヘドヴィヒ、どこを向いても、どこにも、あの平静さ(Ruhe)、とらわれなく快活な気分になる希望が見込めない。これがなければ、なにもよいもの、喜ばしいものは生まれて来ない。

S(ゼーシュテッテン、カロッサの自宅：筆者注)からは郵便を転送させなかったから、ものすごくたくさんたまっていることだろう。その中に、多分あの招待状も。……(以下略) (Briefe. III., S. 53-54)

この書簡の内容については別に考えなければならないが、政治的無知や無邪気さがカロッサのみのものでなく、いわゆる知識人にも見られることに、注目しておきたい。この時期に至るまで、政治的思惟がドイツ知識人一般の伝統にかならずしも馴染まなかったということは、あらためて想起する価値があろう。ポイトラーとはゲーテ研究者のエルンスト＝ポイトラー。ゲーテ博物館長、学術財団《Freie Deutsche Hochstift》の代表者を務めた。

かくして、この年のゲーテ賞受賞者カロッサは賓客としてニュルンベルクにおけるナチスの党大会にでかけて行く。そして9月9日、やはり帰途の車中にてヘドヴィヒにあてて次のような手紙を書いている。

愛しいヘドヴィヒ、風邪を引いて眠れなかったけれど、内心にはまったく

楽しく退却を始めている。もっともすばらしいもの、月曜日には国防軍のデモンストレーションが開催されるということを何度も考慮に入れるように勧められたのだけれど。一つ一つの光景は……はおおげさな印象だ。しかし演説！ このいらだちと復讐心、わけても司法相のものが。……そもそも、総統レセプションには女性は入れなかったし、ローゼンベルクが鋭いアンチ・キリスト教的な演説を行ったオペラハウス（文化大会）でも、ほんのわずかの賓客と党のかなり高い地位の人々だけが入るのを許されていたのだ。付け加えると、すべての人々が、わたしには並外れて親切だった。あんなにもたやすく、ルストやゲッベルスと話ができたとは。けれど、どのような結果が生じることになるのだろうか！（以下略）（Briefe. III., S. 54-55）

案ずるより生むがやすし。党大会に出席したカロッサはこのような思いで帰路についたのであろう。ナチスへの違和感はそのままにして、党の要人たちの「並外れた親切」を素直に喜んでいる。そこで、この暴力的で画一的な支配を強行する国のなかで、たとえばゲーテ的なヒューマンな精神を思い起こさせ、実現させることが可能ではないか、という錯覚に陥ったとしても、このカロッサの場合、不思議とはいえない。ついでながら、彼の『異質の世界』において、彼と個人的に接触する党の関係者のうち、“類型化されたナチ”は、まず登場しない。いずれも、彼の目には一人の人間として、基本的には善良な存在であることが想定されている。このようなかれの描写そのものも、過去を早急に克服する課題を負ったドイツの戦後世代には受け入れ難かったことであろう。

さて、この手紙の最後の部分で「あんなにもたやすくルストやゲッベルスと話しができたとは。でも、どのような結果が生じることになるのだろうか！」とある。ルストとは、カロッサが1933年5月に招聘を拒絶した当の相手、プロイセン文芸アカデミーの主管者たる文化相ヨーゼフ＝ルストであり、ゲッベルスは言論統制の責任者たる宣伝相。そうであれば、この手紙にいう結果のひとつが、このニュルンベルクでのナチス党大会から二カ月後のベルリンのオペラハウスにおける講演へと通じて行くことは、想像に難くない。権力者は甘くはな

いのである。

それでは、この問題となっている講演でに至るまでに、どのような事情が生じていたかをさらに検討しながら、彼の講演への道備えを試みてみよう。

三、

彼の講演は、以下のような言葉で締めくくられた。

ドイツ人の民族共同体の生活圏 (der Lebensraum der deutschen Volksgemeinschaft) はこの年に総統の行為をつうじて強力な拡大 (eine gewaltige Erweiterung) を経験しました。そのことに全国民 (die ganze Nation) が感謝しています。さて途方もない空間の大気のなかを永遠なるものの黄金の響きも吹きわたるために、また祖先の精霊たちが親しく私たちに伴い、そのさい有頂天になるほどあざやかで、勇気をあたえつつ生のなかにたち現れる崇高な夢を派遣してくれるために、そのために必要とされるのは、使徒たちのように過去と現在の間を行き来している、あの孤独な造形家にして告白者である人たちの誠実で静かな協力なのであります。

(Einsamkeit und Gemeinschaft, S. 51)

「総統の行為」への「感謝」が公然と、このとき、この場で語られたという事実は大きい。カロッサのナチズム体制への屈従の証拠のひとつとして、しばしば引用される部分である。そのさい重要なのは、彼自身の思惟如何ではなく、語ったという事実そのものであるという点を忘れてはならない。彼の『異質の世界』のなかに「自己正当化」を読み取ろうと努めた研究者、たとえばクリスティアーネ＝ドイセンなども、この事実のほうを重く見ている。カロッサ自身の思惑とは別に、彼の発言それ自体が独自に影響力を行使するからである。

ところで、講演の全文を通読すれば、この締めくくりの部分はかなり唐突であるとの印象を受ける。その一方でこの発言は、かなり慎重に言葉を選んでなされているようである。

引用文の冒頭の数行は、この1938年3月のオーストリア併合、9月末のチェコスロヴァキアのズデーテン地方割譲にかかわっている。このナチスの侵略政策にカロッサが承認を与えたということなのである。もとより、彼がこの一連の動きに同調していたとは考え難い。これより六カ月前、ドイツ軍が国境を越えてオーストリアに侵入した3月13日に、彼は次のような手紙を書いている。

大好きな、大好きなヘドヴィヒ、今日という日はどんなふうにごすごしただろうか？ わたしは、この外の不穏な世界がその余地を認めてくれる限りは、自分自身のなかにこもった。するといつもすぐにヘドヴィヒとエヴァちゃんに出会うのだ。ラウフェンバッハタールでは情報を知りたくてクレーメンズさんがわたしをコーヒーに招き入れたがった……(略) 心は平和にあこがれていて、興奮させるような会話には耐えられない。そうでなくとも空気は悪いわさで充満しているのだ。そして路上で出くわす兵士たちは疲れ果て、ほとんど意気阻喪した様子で、多くのものは激しい風の中での長い行軍のため完全に目を赤く充血させている……(略) ふたたび、フリードリヒ二世＝フォン＝ホーエンシュタウフェンの物語を初めから読んでいる。すばらしい本だが、ただ読んでいると改めて根本的に納得せざるをえないのは、世界史とはそもそも暴力行為 (Gewalttaten) の連鎖によってのみ成立しているということだ。その点においては何も変わっていないように思える。……(略) …… もし世界からかくも遠く離れて、こんなに重苦しい日々は何の妨げもなく話すことができるのなら、それはとても幸運なことだ。……(以下略)

(Briefe. III., S. 43-44)

「逃避」という言葉がこの文面から連想されよう。そしてヒトラーの政策の正邪よりもむしろ直接に戦争そのものへの不安が、個人的な無力感にとらえられながら、問題になっているようでもある。この日、彼が無力に自己の内面へと沈み込む一方で、グデーリアン将軍指揮下の機甲部隊はカロッサの町であるパッサウ市から陸続とイン川を渡河し、対岸のオーストリア領を目指した。彼

はこのドイツ軍部隊の行く手にいるオーストリアの人々、とりわけ終生の友人であった画家であり作家のアルフレート＝クービーン夫妻の身の上をも考えざるを得なかったはずである。

先に挙げておいた講演の締めくくりの“総統への感謝”にも、カロッサの微妙な言い回しのなかに、そうした彼の意識の反映を読み取ることができる。

「総統の行為をつうじて強力な拡大」という、この「強力な」にあてられたドイツ単語は“gewaltig”。“Gewalt”（支配力、暴力）の派生語であり、これと「総統の“行為”」にいう“die Taten des Führers”の“die Taten”（行為）を合わせれば、先の手紙でカロッサが言及している「世界史とはそもそも暴力行為（Gewalttaten）の連鎖によって……」と重なる。

あるいは「全国民が感謝しています」という、この“全国民”（die ganze Nation）とはだれのことなのか。講演じたいが『孤独と共同体』という統一テーマのもとに行われたものであり、その“共同体”にかかわる単語が入り乱れてもおかしくはない。ところが、“Nation”の語はほかには一回限り、それも彼自身の言葉としてではなく、作家ヴィルヘルム＝ラーベの箴言からの引用なのである。すなわち、「その中に国民（die Nation）が再発見されるような、あの芸術作品のみが持続する権利を有する」（Einsamkeit und Gemeinschaft, S.48）という。

この講演のなかでカロッサはむしろ「民族」（das Volk）という語を主として使用している。例えば、ゲーテに触れて「近世の他の如何なる民族も、これほど力強く、賢明で慰め深い造形者、探求者にして予見者を自らの中から生み出してはおりません」（S.49）と述べている場合である。“Volk”という語を、なにか詩や芸術を生む一種の生命ある有機体として説明しようと試みている。

もちろん、このわずかの文例で決めつけるのは、牽強付会というものであろう。“Nation”はナチス、ナチズムに直接つながる言葉である一方で、“Volk”はこの第三帝国にそれこそ氾濫した言葉なのである。たとえばアルフレート＝ローゼンベルクの主宰したナチ党の機関紙は『民族の監視人』（Völkischer Beobachter）であった。かなり通俗的に一般化すれば、“Volk”とは古くから

の言語、習慣、さらには血縁による概念であり、“Nation”は“Volk”を政治的に統合した概念となろうか。両者は必ずしも重なり合わない。いわゆる“国民国家”というイデオロギーが近代のヨーロッパに流布して以来、二つの言葉はいわば異質の世界を意味することとなったのかも知れない。それはともかく、一見ナチズム体制とその政策への賛辞となっている言葉の背後に、これに対するカロッサの違和感、異議がこもっていることを指摘しておきたい。ドイツ民族「共同体」に対する詩人の「孤独」であろうか。

ニュルンベルクのナチ党大会からほどなく、チェコスロヴァキアのズデーテン地方がドイツに割譲されたころ、カロッサはイタリアに旅をしている。この政治的事件にかかわっての彼の発言は見当たらないが、1938年10月のこのおよそ一カ月におよぶ旅行は、所在をあいまいにするための「逃避」でもあったはずである。講演に関する応諾をうやむやにしたまま出国したカロッサにたいするベルリン当局の要請は、むろん執拗をきわめた。ヴェネツィアから10月17日、以下のように書き送っている。

…… 残念ながらこの郵便の残りは不愉快なことがたくさん入っている。今日はベルリンから並はずれの苦境です。別のやつは二通の長い手紙でようやく断ったばかりのところなのに。こういうものは恐ろしく多くの時間と何かをしようという気分とを奪い取ってしまう。特にこの一番最近の要求の手紙はとてもやっかいな部署から来ている。相変わらず、出版や広範囲の影響など考えずに一つの作品を書きたいと、夢見ている。…… (Briefe. III., S. 57)

文中の「とてもやっかいな部署」(eine sehr schwierige Stelle)は、目下のところ判然としない。続きの文から察するに出版関係であろうか。ともあれ、これらの多面的な要求に屈した彼は、日ならずしてこの旅の途上からベルリンに承諾の書面を送ったはずである。10月26日にフィレンツェで発信された書簡では、すでにベルリン行きの予定に触れ、さらに引用すべきゲオルゲの詩句にも言及している。その三日後の10月29日、同じくフィレンツェ発の書簡には、

ミケランジェロ、シェイクスピア、ベートーヴェンといった人々の名前や読むべき書名を挙げ、具体的な準備に取り掛かろうとしていることをうかがわせる。

いわば逃避の旅が、逆にベルリンへに出掛けることを決意させるに至ったわけである。この孤独なイタリア漂泊のなかで、古典古代以来の遺跡や芸術と対話しつつ、国外亡命者の苛酷な運命に思いを馳せつつ、しかも故郷に安らいで生きることを願う者にとっての苦しい選択でもあった。そして、この選択は、カロッサをさらに別の陥穽へと導き出すこととなって行く。

この講演の内容に関して、さらにその後には彼が経験せざるを得なかった運命の展開については、また稿を改めなければならない。

*この講演の邦訳の全文は、『ハンス＝カロッサの講演《静観的創造行為》について－試訳と解題－』（「ドイツ文学語学研究 36輯 荒木泰教授定年退職記念論集」関西学院大学ドイツ文学研究室、1996年4月発行）において紹介した。ご参照いただきたい。

テキストおよび参考文献:

- Carossa, Hans : Von der Beschaulichkeit des schöpferischen Schaffens. In: Einsamkeit und Gemeinschaft, Hagemeyer, Hans (Hrsg.), J. Engelborns Nachfolger, Adolf Spemann, Stuttgart, 1939.
: Sämtliche Werke I. II., Frankfurt a.M., 1962
: Briefe II. 1919-1936, Kampmann - Carossa, Eva (Hrsg.), Frankfurt a.M., 1978.
: Briefe II. 1937-1956, Kampmann - Carossa, Eva (Hrsg.), Frankfurt a.M., 1981
: Tagebücher 1925-1934, Kampmann - Carossa, Eva (Hrsg.), Frankfurt a.M., 1993.
- Deuen, Christiane : Erinnerung als Rechtfertigung. Autobiographien nach 1945. Gottfried Benn - Hans Carossa - Arnold Bronnen, Tübingen, 1987.
- Loewy, Ernst : Literatur unterem Hakenkreuz. Das Dritte Reich und seine

Dichtung. Eine Dokumentation, Frankfurt a.M.,1990
(1966)

Schnell,Ralf : Zwischen Anpassung und Widerstand. Zur Literatur der Inneren Emigration im Dritten Reich. In : Europäische Literatur gegen den Faschismus 1922-1945, Bremer, Thomas (Hrsg.), München, 1986.

: Literarische Innere Emigration 1933-1945, Stuttgart, 1976.

Wulf,Joseph : Literatur und Dichtung im Drittenreich. Eine Dokumentation, Berlin, 1983.